



発行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局 江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
TEL 0573-43-5087

礼儀を以て心を養うは、則ち
 体軀を養うの利削なり。心、
 養を得れば、則ち身自ら健な
 り。旨甘を以て口腹を養うは、
 則ち心を養うの毒藥なり。心、
 養を失えば、則ち身を亦病む。

(言志後録二二条)

釈意

人が行為とする道を以て、精神の
 修養をすることは、我が身体を養う
 良薬である。精神修養すれば身体は
 おのずと健全となる。うまいものを
 食べ身体を満足することは、精神修
 養する上から害毒となる。精神修養
 をおこたれば身体もそれにしたが
 い衰弱して病氣となる。
 「健全な精神が健全な身体を生む」
 ということである。精神修養なく身
 体を健全に保つことはないのである。
 「良知」(良心)を修養する努力の
 必要性を示す。心の核をなす魂の
 存在は今一人のわたしを意識するこ
 と、鏡にうつらぬ自分、靈魂のあり
 方を意識することにとめるべきで
 ある。

徳増省允

特別寄稿

恕の心

恵那市長

可 知 義 明

佐藤一斎翁の訓に「私欲は有る
 べからず。公欲は無かるべからず。
 公欲なければ、則ち人を恕する能
 ず。」がありますが、この訓を何度
 か新年の仕事始めの行事や、年度
 初頭にあたり、職員に訓の趣旨を
 引用し、職員として、公務員とし
 て、市民の目線で、市民の立場に
 立って施策を考え、計画し、実行
 し、その結果が市民の幸せにつな
 がらなければならぬ。そのため
 には、自ら市民の輪の中に入り、
 市民と共に歩み、行動していかな
 ければ市民の理解、協力は得られ
 ない。積極的な取り組みの姿勢と
 熱意ある行動を示してこそ、市民
 の評価も得られ、共に協力しあつ
 て仕事ができる。これこそが協働
 のまちづくりの原点である。と、
 市職員全員に訓辞してきました。
 積極的に仕事に取り組むという
 公欲を持ち、市民の目線で、市民

の立場に立って考える「恕の心」
 でもって各自の仕事に精励するよ
 うにとの思いを込めて、職員の奮
 起を願ったものであります。

言志後録二二三条に「恕に遠ざ
 かるの道は、一箇の恕の字にして
 争を息むるの道は一箇の讓の字な
 り。」(人から怨まれないようにす
 る道理は恕(おもいやり)の一字で
 ある。常に人に対して「おもいや
 り」と「ゆずる」の心をもつて接
 すれば争いはない。そのため常に常
 に心の修養が大切である。)との訓
 は、現在の索漠とした世の中には
 最も必要な訓であると思います。
 個人の考えが優先し、全体や他人
 の立場を顧みることもない。また、
 総て金銭が優先し、金銭で何事も
 解決したり、物事の価値を金銭で
 位置付ける。いわゆる金権万能主
 義的な考え方が中心となつて世の
 中が回っている観があるように思
 います。相手の立場を考えたり、
 他人の気持ちや気遣うことや、お
 互いに譲り合う精神は、一体何処
 へいつてしまったのか。個人の主
 張やその人権を護ることは重要な
 こととは思いますが、そのために
 他の人の迷惑や、個人の主張によ
 り人の人権が侵害されていいもの
 かも考えなければなりません。一
 斎翁の訓にあるように「おもいや
 りの心」と「ゆずる心」があれば、
 今大きな問題となつている子供の

「いじめ」などは、当事者相互の
 気持ちで解決していくのではない
 かと思います。社会面においても
 常に争いが問題視され、世界的に
 みれば民族間において、また、宗
 教の異なることによる紛争があり
 大きな戦争の火種になりかねない
 現状にあります。人々の心に恕の
 心があれば、少しでもより明るい
 社会の実現が図られそうに思われ
 ます。

NHKの大河ドラマ「天地人」
 の主人公 直江兼統は、越後の国
 のことを心から想い、越後の民百
 姓を大切にし、自らは民を護る護
 民官と位置付け、民を愛する心
 持つて家老職に当りました。兼統
 は恕の心を越後の国を護る精神と
 したと言われ、自らの兜に「愛」
 の文字を前立とし、民百姓のため
 に命をかけて戦つた武将であつた
 と言ひ伝えられています。この
 ドラマが好評で視聴率が高いのも
 恕の心を持つ兼統の人柄に魅せら
 れ、そしてその生き方に共感を覚
 えさせるからではないでしょうか。

県立明智商業高校(現恵那南高
 校)が今から二十年前の平成二年
 に、恕の心を育てる教育の実践を
 行つております。その取り組みの
 成果の記録を見ますと、テーマは
 「人間性豊かな生徒の育成を図る」
 「地域に根ざした体験を通して、
 恕の心を育てる」として、勤労や

奉仕にかかる体験学習を積極的に自主的に取り組ませ、自己と地域社会とのかわりを理解させ、恕の心を育てるというものでした。

「奉仕とは思いやりの心」町内の日本大正村の諸施設の清掃奉仕活動を行い、その奉仕体験を学校内の清掃美化活動に結びつけていくことで、奉仕活動を自ら進んで実践できるようになり、また、奉仕活動で体験したことが、日常生活の改善に結びつくような活動となった。これは、生徒の中に恕の心が徐々にあるが育ってきているということだ。と報告されていた。この恕の心を育てる教育は今も恵那南高校に、そして地域に深く根差し、広く輪となって広がっているものと信じています。

二年ほど前、市内の小中学校を訪問し、教育の現場の状況を見聞きする機会がありました。ある小学校の校長室に「恕」の文字の額が掲げられているのを見つけ、校長先生に尋ねたところ、「私は恕の心が大好きです。子供達が優しく思いやりのある子に育ってほしいですね。これが私の願いです。」との言葉に大きな感動を覚えました。どうか、一齋翁の訓とともに、恕の心をもつ人々の輪が大きく広がり、次世代を担う子供たちに恕の心が大きく大きく育つように、心から願っております。

嚶鳴フォーラムに 期待するもの

理事長 堀井 将成

思い返せば五年前、特定非営利活動法人いわむら一齋塾設立記念事業として隣接三市（豊田市・東海市・恵那市）の市長様にお集りいただき、鈴木正三（豊田市）細井平洲（東海市）佐藤一齋（恵那市）の三先人の教えを生かした「人づくり・心そだてはまちづくり」と銘打ったフォーラムが、三市市長様・童門冬二先生の御指導御協力により、五月の連休の中、岩村公民館にて七百五十余人の参加を得て開催されました。

東海市鈴木敦雄市長は以前より、全国に呼び掛けている事業構想を持たれてみえた様子で、当日、可知市長に、お手伝いの依頼があり、市長も賛同されました。

翌年、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて、東海市主催（現在は協議会）第一回嚶鳴フォーラムの開催となりました。鈴木市長、童門先生、PHPの呼び掛けで、全国十三市の市長さんの参加となりました。

鈴木市長より、嚶鳴フォーラムの命名について、江戸で細井平洲先生開設の嚶鳴館にちなみ決めら

れたとの説明に、誠に当をえていると感銘しました。

形ばかりのセレモニーにならぬ、実のある実行性のあるフォーラムとして続けられたらとの思いにかられました。

鳥がさえざり合う様に、各人、各市が意見を研鑽し、実行して行かなければと思います。

昨年、第二回が「子供の学び」をテーマに、高島市で開催されましたが、少し不安な事は、市長サミットの中で、各市が子供の交流・学校の先生・市民文化活動の交流等を採決されたと存じていたものが、どれだけ交流があったのか、不安であり、疑問でもあります。

第三回嚶鳴フォーラムin恵那のテーマは「親学」です。昨年の「子供の学び」とセットで実行してゆく事に意義深いものがあります。

現代社会は、腐敗した状況になっています。心の腐ったのはどうしようもありません。ちなみに醜酔学的には腐敗と云う状態は決して悪い事ばかりではありません。鮒すし、鯖のへしこ、中国の搾菜、魚醬、くさや等々非常にくさい。腐敗菌の臭いです。しかし味はこのうえもなく珍味で美味です。柿渋も腐敗菌から出来ます。また多々ありますが、生活に不可欠な貴重

品です。

長々と腐るについて書きましたが、人間の心の腐敗と、自然界の物の腐るとは、天上・天下ほどの違いのある事を認識していただきたいと思います。落葉が腐れば肥料になります。腐敗菌も種々条件が変われば美味食品になり世間の役に立ちます。

人間様も、親（大人）の行動が子供の教育・躾に結びつきます。親がにぎり箸で椀を持ち、肘突きで食事をします。家族団欒の時に人様の悪口を云う。この様な風景を思いうかべてみましょう。子供達が、これが普通だと思ふ事がこわい。

江戸時代、商人江戸しぐさの教えに、傘かしげ・肩引き・こぶし腰浮せ等々、思いやり・気配りの心や子育てに、「三ツ心・六ツ躾・九ツ言葉・十二文・十五理で未決まる」と云う諺があり、稚児の段階的教育法があったようです。

ここに江戸末期最高学府の教育者佐藤一齋の書、言志四録の晩録二二八条に「家庭の道德」その一よりその四迄が、親学の際たる言葉と思い記してみます。

家庭の道德 その一

親に事うる道は、己れを忘るるに在り。子を教うるの道は、己れを守るに在り。

家庭の道德 その二
父の道は当に厳中に慈を存すべし。母の道は当に慈中に厳を存すべし。

家庭の道德 その三
父の道は厳を貴ぶ。但だ幼を育つるの方は、則ち宜しく其の自然に従つて之を利道すべし。助長して以て生氣をそこなうこと勿くば可なり。

家庭の道德 その四
兄弟の友愛なる者は之れ有り。姉妹に於ては則ち或は否らず。傲侮して以て不順なること勿れ。李英公、姉の為に粥を煮たり。学ぶ可し。

親が親学などと肩肘張らず、地域や家庭で、良好な土壌と環境さえあれば、自然醗酵的に良い子は育つものではないかと思えます。

佐藤一斎歿後百五十年の年忌の年に「嚶鳴フォーラム in 恵那」が行われる意義は大きい。市長サミットの決議文が楽しみです。永続実施される事を切望する恵那市民の一人です。

皆様、いわむら一斎塾で言志四録を読みませんか。毎月第二土曜日午後七時三十分より公民館で素読の会を行っています。一斎さん何かを示して下さいませよ。

肖像画が語る

人間・佐藤一斎

三幅を紹介します

樹神 弘

幕末の大儒学者・佐藤一斎の肖像画は何幅か残されていますが、このうち渡辺崋山筆の肖像画は国重要文化財に指定され東京国立博物館に所蔵されています。

(写真参照) 一斎はときに五十歳眼光炯炯 眼が鋭く光り、物言のすべてを見抜いているように思え精悍という印象をうけます。この肖像画の一斎の左側の首筋つけ根を見ると、瘰癧(るいれき)の手術の痕が点々と描写されています。

一斎が瘰癧を患ったのは五十歳以前ということはわかりませんが、正確な年齢は不明です。百科事典に瘰癧は「頸部淋巴腺結核」の別名(または古名)とあります。結核により頸部の淋巴腺が化膿して連鎖状にはれ、のちに破れるので手術をするということですが、現在では化学療法により治癒するので手術はしないそうです。

二幅目は渡辺崋山の弟子である椿椿山筆による肖像画で、安政二年(一八五五)一斎は八十四歳のときのものです。「佐藤一斎自讃画像軸」と称され、岐阜県指定文化財で、岩村町歴史資料館所蔵で

す。この肖像画にも前記した瘰癧の手術のあとが描かれています。

太刀を左脇に立てかけ、侍鳥帽子を冠り、素襖を着て皮の敷物に座っています。腰に小刀、右手に扇子という極めて武士らしい様子です。椿山の肖像画の上部に一斎自ら筆をとって自讃しました、この一幅にも一斎の人間らしさがあります。一斎の自讃は

「顔容易変画真難

今日人非昔日人

抵老不衰祇一志

須從影外認吾神」

(顔容は変じやすく画は真たり難し。今日の人は昔日の人にあらず。老いにいたりても衰えざるはただ一志。すべからく影外よりわが神を認むべし)

実はこの自讃の七言絶句を一斎のような大学者でもミスをしました。起句の六・七字目の「真難」は人・神と押韻の関係から「難真」とあるべきで、一斎もあとから気がつき書き直しができないので、二文字の右側に「の」記号をいれて上下の入れ替えを示しました。一斎も人間なるかなと思わせます。

一幅目は五十歳、この自讃画像では老いは隠せず、表情はいかにも好爺爺という印象をうけます。

三幅目の紹介は一斎が自ら自身を描いた自画像で東京国立博物館

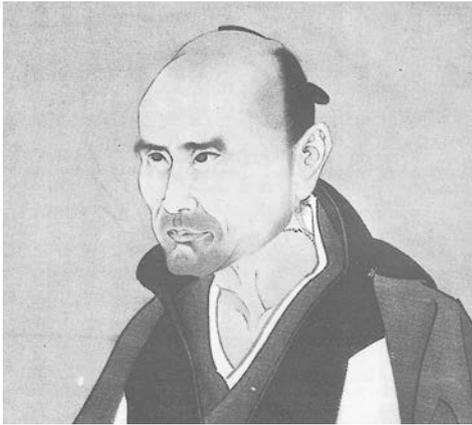
に収蔵されています。この自画像は河田家に伝えられたものですが、河田家とは、一歳が天保四年(一八三三)六十二歳のとき門人の河田迪齋に八女の神(總を嫁がせ、学問上の後継者となりました。表装の裏に「一斎翁戲墨画像」という河田烈の識語があります。

年令を確定することはできませんが、その容貌から見て、晩年に近い頃のものといわれています。

墨を主体に淡彩を加えた描法は俳画に通ずる趣があり、どこことなくユーモラスな表情は他の肖像画にない人間味に親しみを感ぜさせます。紹介した三幅の他にも東京国立博物館には、椿山の一斎八十歳夫人七十三歳の夫妻像各一幅、水戸藩内藤右膳筆は一斎六十二歳のときのもの、そして八十八歳最晩年のものとして石丸師曾筆のものもあります。非公開です。

紹介した崋山筆と椿山筆の一斎像は岩村町歴史資料館で常時展示しています。ただし崋山筆のものは複製画ですが精巧なもので、本物と寸分の差もありません。同館になぜこの複製画があるかについてはプライベートな問題があるので本文では触れません。

昭和六十二年に岩村町歴史資料館で「佐藤一斎特別展」を開催したとき、東京国立博物館のご好意



により、本文で紹介した肖像画の全部を借用して展示できました。その折に資料として「美濃岩村藩が生んだ、大儒学者佐藤一斎、言志四録と書画を通して」B5版二十四頁を発行し一斎七歳のときの書など数点も併せて掲載しました。「いわむら一斎塾報」の「一斎塾が紹介する書籍のうち（佐藤一斎 三百円）とあるのがそれで五版まで発行しており、岩村町歴史資料館でお求め頂けます。絵画を文章で表現するのは難しいので、資料をご参照ください。

元総理大臣吉田茂の養母土子とこは一斎の孫であり、元農林大臣、大蔵大臣を歴任した河田烈は迪斎の孫ですので、二人とも一斎の曾孫という系譜になります。前総理大臣麻生太郎は吉田茂の孫ということとを付記します。

一 斎翁歿後
一五〇年祭によせて

徳丸和枝
（藤樹書院評議委員）

佐藤一斎歿後一五〇年祭、おめでとうございます。恵那市発行のカレンダーをみながら、昨年の藤樹先生四〇〇年祭の諸行事の感動を思い起こします。

文化四年八月十五日、一斎先生は五十歳の時に高島市の藤樹書院に参拝され、敬慕の詩を残されておられます。

「碩人已みぬ 幾星箱
景慕し今顔せず 徳本堂に
遺愛の藤棚 荒れて益々古く
弧標の松幹 老いて愈々蒼し
氣常に和する処
春長之に燠かく
月正に霽れる時 風又光る
尚見士民 礼讓に敦く
疆に入れば 問わずして君の
郷たるを識る」

現在もこのかけ軸は藤樹書院に掲げられておりますが、四〇〇年祭では開催行事ごとに元海東市長は後句二行をとりあげ、高島市と藤樹先生の遺徳を市民に啓蒙されました。

本年六月七日、藤樹書院・良知館では一斎先生のふるさと、恵那

市岩村町の岩村歴史資料館の研修を行いました。

資料館では、椿椿山描く佐藤一斎自讃画像軸や渡邊華山の描いた若き一斎先生も拝謁することができました。なかでも、七十二歳老人坦と書かれた「自戒の詩」は「言志晩録」を書かれた時期と思われるますが、死妄の毀り、矜侈、憤幾、尤警など先生の言葉が目前に迫ってきて釘づけになってしまいました。

「我ら勝縁によつて相学ぶ、一斎先生曰く、少くして学べば壮にして為すあり、壮にして学べば老いて衰へず、老いて学べば死して朽ちず」。

これは関西師友協会が講座受講前に起立して朗誦する「聞学起請文」の第二項の文ですが、この有名な三学戒は、高島市でも公民館ホール入口に地元の書家による扁額として掲げられ、市民が目留めるところです。

九月六日、一斎塾大阪講座が開催され、ここでも神渡先生揮毫による三学戒の石碑が紹介されました。

当日講演された神渡先生は、先日上梓された「言志四録佐藤一斎」、「西郷隆盛人間学」の二冊を中心に、森信三、星野富弘、坂村真民、ニューヨーク州立大学病院の壁の



詩など多義に渡つて話されましたが、各々の方が共通して持つ「志」がいかに人を大きくしていくか、熱い思いが伝わってまいりました。

言志四録から一〇一条を筆保された西郷隆盛の「南洲手抄言志録」の序文に「天下は人心益々軽佻に走り、道念の光明漸やく微薄となり、人心の闇は益々暗黒とならむこの暗黒の中を行く一張の提灯を授く」とありますが、まさに現代でも当てはまるものです。

「暗黒を嘆くより一燈を点けよう。周囲の暗を照らす一燈に」と提唱された安岡正篤師の教えは、私達の確固たる道標です。

十月からの嚶鳴フォーラムは、ふるさとの先人の教えを学び一隅を照らす一助となるでしょう。藤樹会の皆さんと楽しみに出かけたと思います。

佐藤一斎歿後

一五〇年祭を迎えて

副理事長 鈴木 隆一

安政六（一八五九）年九月二十四日、佐藤一斎は幕府の学問所昌平疊の官舎で八十八歳の天寿を全うされました。

歿後一五〇年記念を冠した「嚶鳴フォーラムin恵那」も昨年発足した実行委員会で進捗状況を確認しながら、いよいよ本番を迎えました。

嚶鳴フォーラムは、その趣旨に賛同した全国十二市が協議会を組織し、本来は担当者の協議会と一回のフォーラムを開催することになっていますが、今回は佐藤一斎顕彰会とNPO法人いわむら一斎塾も相乗りさせていただき、協力しながら年間を通じて歿後記念事業のひとつ「一斎塾」を進めています。

この「一斎塾」は、過去五年にわたり、「いわむら一斎塾」が主催し、地元岩村で年六回ほどつづ「郷土の先人から学ぶ」を主テーマとし、大学教授や研究者などに講演をいただいた全国版にあたるものです。

因みに、本年四月の恵那会場を皮切りに九月の大阪会場まで九回

の一斎塾を開催してきました。

五月四日（月）は、佐藤一斎ゆかりの東京湯島聖堂で、窪田哲夫氏（佐藤一斎言志四録普及特命大使）に、「佐藤一斎『言志四録』今求められること」と題して、ご講演をいただきました。東京在住の恵那市出身の方や佐藤一斎のファンの方など、講堂一杯の約百名が、講師のほとぼりするような熱弁に耳を傾け、明日への力をもらって帰途につかれました。

また、九月六日（日）は、佐藤一斎が二十一歳のとき、大坂の懐徳堂中井竹山に一時師事したことに因み、大阪大学中之島センターで、作家の神渡良平氏の「西郷隆盛と佐藤一斎」と題してご講演をいただきました。西郷さんは、言志四録から一〇一条抜き書きし、自己の修養に資し、あの有名な「敬天愛人」の言葉の源にもなったほど愛読されていました。

さて、記念事業に対し、恵那市や東濃一円の方の多くの方に関わっていただき順調に進んでいます。予測だに思わぬ援軍が現れ感動しております。

「佐藤一斎の教えによる三つの歌」を、「日本の歌を歌う会」や高齢者大学などで、指導されている田中吉徳先生と、現代舞踊グループ「心花プロジェクト」代表で

若さあふれる市川雅子さんです。

田中先生は、「いわむら一斎塾」の地道な活動へ想いを強くされ、その応援歌を作成しようと、作曲家への依頼や個別に練習用のCDやテープを配付されるなど、一斎の教えを気軽に歌い、親しんでほしいとの篤い気持ちをお寄せいただいております。

親しみやすい「順境は春の如し」、格調高い「清きものは」、重厚な「三字」。

どれもすばらしく、永く歌い継ぎたいものです。

市川さんの「心花」には、魂を揺さぶられました。
「人生には何ひとつ無駄なものはない」。この想いを抱き、「自分の信じた道をまっすぐに」をテーマに、短い時間のなかで構成された七つの場面を転換しながら、凛として踊る姿には感動させられます。

「言志四録」の言葉が、このよくな形になろうと誰が予想したのでしょうか。もし、一斎先生がこれを観られたら、「我が意を得たり」と膝をたたいて喜ばれるにちがいありません。

このように歿後一五〇年記念が嚶鳴フォーラムと相俟って、多くの方たちのお力添えによって進められていることに感謝感謝。

佐藤一斎の

詩文推敲

会員 若森 慶隆

門弟三千人と云われた佐藤一斎。そんな事もあつてか、各地には一斎に係わる書幅・書翰・石碑等が存在する。事を認めて間もないものから卒後に及ぶものまで、或いは忘れ去られた書幅の反面、見上げるような巨大石碑まで諸々である。それらを幾つか眼にする内に少し気になる事が湧いてきた。と云うのも、これらに書かれた文字と一斎生前に唯一出版された『愛日楼文詩』掲載の本文とを照合すると、文字の異同・追加・脱落等が随所に見られるのである。思うにこれは『愛日楼文詩』が一斎の下書きである『愛日楼稿本』を原稿とした事に起因しているようである。則ち因幡若桜侯池田冠山と大和小泉侯片桐遜齋が『愛日楼稿本』を借読して抄写し編集したものが『愛日楼文詩』として出版の際には、一斎自らが文字の手直しを行った事が考えられる。従って、それ以前に乞われた撰文が石碑に鐫刻され、序文・跋文の載った出版物も上梓されていた訳である。また、一斎卒後に嗣子佐藤立軒が編集した『愛日楼文詩』があるが、これも『愛日楼稿本』とは文字の



異同・追加・脱落等が見受けられるようなので、一斎は仮令すでに自身の撰文が鐫刻され、序文・跋文が載せられた出版物が上梓の後、意にそぐわないと感じた文字を推敲していたに違いない。

その代表例として、滋賀県の藤樹書院所蔵の書幅二本と、東京都の上野源空寺の伊能忠敬墓碑を挙げたい。

藤樹書院の書幅は、『藤樹書院に詣る』と、『旧制に題す』の共に七言律詩である。第一句、第二句、第七句に異同が見られ、特に第二句は全面改作されている。

伊能忠敬墓碑は、『東河伊能君墓銘并叙』とあり本文は九〇八文字。『愛日樓文詩』所収の『伊能東河墓碣銘』は本文一〇五一文字から成っている。特に、文末で忠敬の嫡孫が叙を請う文章は、『墓銘并叙』に比して『墓碣銘』は四章に成っている。

石川忠久先生監修

「新漢詩紀行」を見て

会員 山口 通子

現在NHKBS3で午前七時二十分から三十分まで(月・金曜日)の五分間「新漢詩紀行」という番組が放送されています。

平成十九年十一月に恵那市中央図書館で「詩人としての佐藤一斎」と題して講演された石川忠久先生が監修されていて、毎週金曜日には、あのにこやかな顔を私達に見せて下さっています。唐の時代八〜九世紀頃の詩人、杜甫、李白、王維等名前を耳にした事がある詩人も多く古の人々の生活を窺い知ることが出来ます。

石川先生は、詩の説明、作者の心情、時代背景など、細かく感情を込めて説明して下さい、毎日の朝の五分間が私の楽しみの一つとなつています。当時の詩が今尚私達の生活の中で生き続けている部分があります。孟浩然の一節「春眠曉を覚えず」とか、杜甫の一節「人生七十古来稀なり」(ここから古稀の言葉ができた)等。

俳優加藤剛の朗々と謳う声に又感銘を受けます。理解できない処も多々ありますが、わからずとも魅力一杯の番組です。皆さんも是非ご覧になって下さい。

「いわむら一斎塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一斎翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

目的達成の取り組み

- (1) 佐藤一斎の教え(「言志四録」)を学ぶ定例学習会の開催
- (2) 郷土の先人や歴史に関する公開講座及びワークショップの開催
- (3) 各種団体等からの要請による郷土の先人に関する講師の派遣
- (4) 郷土の先人に関する情報誌・書籍の発行
- (5) 郷土の歴史や先人に関する書籍・論文・資料の収集
- (6) 郷土の先人の知恵を今に活かすイベント・フォーラム等の開催及び協力
- (7) 郷土の先人から学ぶ関係団体との研修会及び交流会の開催

一斎塾が紹介する書籍

- 名言録集 五百円
- おじいちゃんとおぼく 千五十円
- 言志四録抄日捲り 七百元
- 大人の寺子屋 六百元
- 重職心得箇条 八百元
- 生き方ルネッサンス 二百六十円
- 佐藤一斎の思想 二百六十円
- 佐藤一斎 三百円
- 下田歌子著
- 女子の修養(現代語訳) 七百元

あとがき

市内のあちらこちらで佐藤一斎歿後百五十年祭囃鳴フォーラムの旗が開催を待ちわびているかの様に私達を迎えてくれます。七号は記念特集として、二頁増でお届けします。お忙しいなか、玉稿をお寄せくださいました、可知市長様、樹神様、徳丸様、ありがとうございます。一斎塾の皆様のおかげにも感謝致します。

歿後百五十年、今に生きつづける一斎先生の教えが親から子へ、子から孫へ大切に伝えつづけられていくことが私の願いです。

